僕は嬉しかつた。

たつた一人の女に失戀したからと言つて、十年以上も、他の女を戀する事をしないで、ガサツな生活をしつゞけた事が後悔されて、無想庵の結婚禮讃で目を覺まして、發狂した僕にとつて、ハルコトコンヤクタノムと、電報を打つても、辻潤がニタ笑つてゐる事は悲しい。

僕は手近の女で慰められなければならない。

何んなに女が愛を込めてよそつてくれる飯粒は、喉にヒツカゝらないで通るかも知りたければ、又破れた頭を埋むべき、柔らかい膝をも僕は求めたのだ。

お正月は數日後に迫つてゐる。

鐵道問題に關して、町民大會が壽座で開かれると言ふ寄だ。

僕は酒井でウイスキイを飲んで、可成醉つてゐた。

それに、梅毒で發狂したものは、再發して全然癒らないとか、酒井が言つたのが胸にこたえたり、警察醫がブロムナード、チンチメタルと書いた表題で辻潤が——新吉は遂々發狂した——などゝ書き出してゐる東京朝日を、先刻置いて歸つたと言ふのを讀んだりして、昂奮してゐた。